

川下の風景⑤

～人生は川の流れるように～

米津 達也

【そして、彼は出て行った】

2022年、相変わらず世界の変化は目まぐるしい。グローバル化によって、情報・物・人の流れも早く流れて、地球の裏で起こっている出来事が瞬時に手のひらに届く。常に情報と変化を知りつつ、アップデートを重ねて行くわけだから、どうも必要以上に目まぐるしい日常を送っている気がする。

身近な変化で言えば、2022年は2年に1度の診療報酬改定の年。医療現場で働くわけではないので、点数の詳細を知る由もないが、介護業界で働く以上、無関心でいられない。医療の流れは、介護に影響を与えるし、双方の制度が車輪の両軸となって少子高齢化の社会保障制度を形作る。前回の改定から2年。この2年間はコロナ禍という大きな変化によって、医療現場確保の重要性が取りざたされた。それは、単に病院機能だけではなく、医師や看護師の働き方や処遇にまで及ぶ。コロナ禍が無ければ、もっと医療の「適正化」に踏み込んだ内容になっていただろう。

医療においても、介護においても、報酬改定では「適正化」という語句が頻繁に聞かれるようになった。つまり、必要なものに投資し、不要なものは縮小する。限られた π を、如何に有効に使うか、という「適正化」。その根底にあるのは、もちろん少子高齢化という将来像に対してだ。前述の通り、コロナ禍の影響もあり、2022年診療報酬改定は大きく「適正化」に踏み込めなかった。次回改定は、2024年。これは医療・介護同時改定の年に当たる。2025年問題、つまり、団塊の世代が75歳に移行することで、医療・介護ニーズが増大するだろうという試算のもとで、2024年同時改定は注目を浴びてきた。しかし、布石は更に先、2040年にターゲットを絞り始めている。世界に類を見ない長寿社会、団塊の世代は90歳に到達する年。そんな先の変化も見据えて日々の仕事に勤しむ必要があるとは…両手では収まりきれない情報と目まぐるしさに追われている。

【ヤングケアラー】

数年前には社会に浸透していなかった言葉が、急速に注目を浴びて社会問題化され、診療報酬改定においても課題として挙げられる。昔からそういう問題はあるだろうが、こういう社会の取り上げられ方は、流行の歌を聞かされているようで心配になる。

エレベーターも無い、古い団地の玄関扉を開くと、いきなり布団とテレビが目の前に飛び込む。部屋ではなく、廊下だ。廊下に布団を敷き、布団の上にテレビとゲーム機を置き、そこで少年

は寝起きをしている。ダイニングを除いて、3つある部屋のうち、2つは段ボールとタンスに占拠され、足の踏み場もない。収まりきれない段ボールは、ダイニングにもあふれ、少年が寝起き出来る居住空間は、必然的に廊下に追いやられる形だった。家族は、父と母の3人暮らし。一番奥の部屋にベッドとテレビ。たくさんの衣類、装飾品、化粧品の数々。ベッドで母が休み、その隣の床で父が寝起きをしている。積み上げられた段ボールの数々は、その大半が母の衣類や装飾品であり、玄関に積み上げられたハイヒールや派手な靴の数々も母の物で埋め尽くさ

れた家だった。

ガスコンロの上には、調理済みの鍋が置いてある。白菜、ニンジンを炊いた鍋物。炊飯器は蒸気を上げて米を炊いている。少年が食べているのは、カップ焼きそば。自分がアルバイトした金で買って、自分で湯を沸かして食べる。廊下の布団の上で。ダイニングでは父と母が煙草をふかし、見えない少年に向かって、母は時折苛立ったように声を掛ける。

母の苛立ちの原因は、金が無いこと。金が無いし、食料も無ければ、必要な化粧品も購入できない。そんな逼迫した状況に苛立っている。背景には、父が脳梗塞を患ったことも関係する。金の稼ぎ手であり、買い物に行く父の役割。病気によって歩行もままならない父の状況に苛立ち、一気に介護者、家事の担い手、アルバイトを通じた金の稼ぎ手、という役割を少年は押し付けられている。

【そして、少年は出て行った】

脳梗塞の発症により、自宅での排泄もままならず、歩行も覚束ない状況になったため、父は介護サービスを受けることとなった。母は長く精神疾患も患い、通院を続けている。そんな母の生活を支え続けていたのは父であったが、状況は一気に変化した。少年がちゃんと学校に通っていたかどうかは分からない。義務教育の年齢ではないため、アルバイト中心の生活だったようだ。家族の為に働く、というよりも、自分で稼いだ金で食べる物や衣服、ゲームやスマートフォンなどの欲しいものをそろえてきた。父の病気によって、彼はその変化に対して決断をした。住み込みのアルバイトを見つけ、家を出る。出会って僅か数日。少年は必要な衣服や生活用

品を旅行用のアタッシュケースに詰めて出て行った。「行ってきます」と両親に告げて。

母は水商売。父は土木業。互いに再婚同士。少年は母の連れ子と共に育った。整った顔立ちは両親に似ていて、年齢の割に幼さを感じる。末っ子らしい、愛くるしさ。彼が出て行ってから、一度だけ、自宅で再開する機会があった。手にした金を計画的に使えない母である。帰省した我が子に、両親は金を無心する。まるで、育ててやった恩を金で返せと言わんばかりに。その時、少年は古びた二つ折りの財布から、しわくちゃの千円札を取り出し、父に渡した。傍で見ていた私からすれば、こんなろくでもない両親に、何故少年が金を渡さなければいけないのか、と思う。しかし、それを口にする事なく、その小柄な手から、渡される千円札の行方だけを眼で追った。

【適正化と、私たちの生活】

医療・介護の「適正化」の根拠になるのは科学的データである。つまり、大多数のデータから平均化された社会。こういう病気の人、障害のある人には、こういうアプローチが適切かつ、効果的と評価される社会。治療も介護も、金を掛けるからには、ますます効果を求められる。介護ビジネスで生きてる私は、そこに異議を挟む気はないし、そういう変化の制度と社会に生きている。しかし、仕事としての私の生活はそこに成り立っても、少年の生活は同じベースで成り立っていない。だから、流行歌のようにヤングケアラーとして彼を捉える気にはならない。少年は自らの意思で出ていき、困窮する両親に金を手渡した。変化に対して右往左往するだけでなく、自ら対処する彼の力強さ。幼さの残るその面影を今も時折思い出す。

2022.2.18 米津達也